

Embodied intelligence - Space, Time and Home 家。彼女たちの時間のかたち



Embodied intelligence - Space, Time and Home

家。彼女たちの時間のかたち

家をしまう決意をする時 彼女は家について 語りはじめる

辿ってきた時を慈しむように

憎んでいた家を愛していたことに気づくこともある

心地よい家ばかりではない しかし最期まで居たいという愛を貫くこともある

安堵とともに 迷いながら 小さなため息をのみ込んで

敷居を跨いで家を出る

かすかな声に 振り返り

「あと少し 柚子をとっていきましょう」



写真：新津保建秀

私たちは、歴史的、文化的に貴重な住宅建築（住宅遺産）を次世代へ引き継ぐ活動を 15 年あまり続けるなか、様々な住宅の継承に立ち合ってきました。

それは、家をしまう決意をした所有者、とりわけ女性たちの声に耳を傾けた日々でした。

彼女たちは、長い年月、その家で暮らし、家のさまざまな空間と対話し、愛し、手放すにあたり、壊すのではなく、残すことを望みました。何十年と重ねられた時間のなかで、その空間にはリアルな生活の記憶が刻まれ、彼女たちがしつらえ、手入れした暮らしの道具や美意識で埋め尽くされています。

彼女たちの声に耳を傾ける時、家の記憶として沈んでいた暮らしの実感が立ち上がります。

今ほど、「家」が国や地域、文化を越えて重要なテーマである時代はないかもしれません。世界的なパンデミックの発生で私たちは家から出られないという経験をしました。戦争や自然災害によって家が失われる姿を、メディアを通じて目にしない日はありません。日本では、経済合理性の名のもとに開発が繰り返され、有り余る住宅が供給された今でも、スクラップアンドビルドは日常の風景です。

しかし、どんなにテクノロジーが発達しようと、人の暮らしの本質は変わらず、「家」には、Embodied Intelligence（暮らしに具現化される知性）が集積されています。私たちに届くそのひそやかな声は、家とそこで営まれる暮らしが、かけがえのない存在であることをあらためて気づかせてくれます。

本展覧会では、彼女たちが主役です。

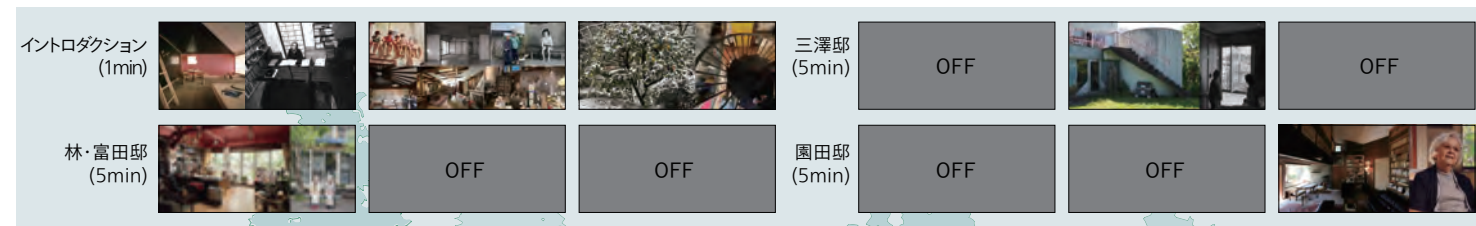
これまで、戦争や成長の掛け声のなかで、かき消されそうになりながらも、しなやかに、したたかに暮らしの時を紡いできた彼女たちの声。その声を手掛かりに、あらためて「家」とは何かを考える。それが展示の主題です。彼女たちの「時間のかたち」として「家」を読み解くことによって、そこに懐かしい未来、幸せな地平がひらかれていくように感じるからです。

いくつもの未来が、過去の時間の中にある、暮らしの経験の時間に内在しています。

本展覧会のテーマである、彼女たちの「時間のかたち」(Embodied Intelligence)を3つの「家」の展示を通して表現します。

家に刻まれた時間をテーマとするメイン展示から、3人のアーティストが、「土(地)」「時間」「水」「音」を意識して作品を制作、表現し、普遍性へ展開します。

MOVIE TIMELINE 映像コンテンツを順次、時間差でループして投影



壁面および柱面をスクリーンとした住宅室内の映像

イントロダクション:様々な住宅遺産の事例をコラージュで紹介

園田邸:室内の映像+インタビュー

林・富田邸:室内の映像+インタビュー

三澤邸:室内の映像+インタビュー

その家のシンボル、
エピソードにまつわる
家具等(実物)を置く



1



2



3



4

〔アーティスト参考作品〕

1. ホセイン・ゴルバ
「水鏡 アンドレイ・タルコフスキーへのオマージュ」1990年 宇部市蔵
撮影:ピエンナレ"Beyond Meditation" Poznan 2010年
2. ホセイン・ゴルバ「空の心」2005年 個人蔵(葉山)
3. 中谷美二子
「霧の彫刻 #47610」- Dynamic Earth Series I -, 長野県立美術館(常設)
4. 鈴木昭男「点音(おとだて)」2012年 神奈川県立近代美術館蔵
撮影:神奈川県立近代美術館 葉山

展示室：彼女たちの時間のかたち

1. イントロダクションー3軒の家の社会的背景

- 現代日本の住宅を取り巻く社会的状況、課題について
- 住宅遺産トラストが継承に取り組んだ住宅建築の事例紹介など

2. 3つの「家」

- 自由が丘の家(園田邸):吉村順三設計/1955年
- セキスイハイムM1(林・富田邸):積水化学工業+大野勝彦/1972年
- 三澤邸:吉阪隆正+U研究室/1974年

吹抜:時の軸(光の井戸)

空と日本館と大地を光でつなぐ吹抜において、ホセイン・ゴルバが「家」に宿る「時間」をかたちにします。

ピロティ:「地」

光の井戸を受けとめるピロティには、土を敷き、石を積んで水面を作ります。
ジャルディーニ公園からの風に、中谷美二子は霧のかたちを与え、鈴木昭男が耳をすませます。



展示室内イメージバス

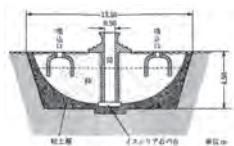
ヴェネチア—日本館—吉阪隆正

富田 玲子

ヴェネチアは、ラグーナに浮かぶ80ほどの小さな島が寄り集ってできた都市だ。

マルセル・ブルーストは言う。

「私を乗せたゴンドラは小さな運河をすずんで行った。運河は、私が進むにつれ、この東方の町の迷路の中を導いてくれる魔神の手のように、私のためにこのこみ合った地域の真中を断ち割って道を切り開いてくれるような感じだった。ムーア風の小窓のある高い家並は、気ままに刻みつけられたほそい裂け目によってかろうじて分けられて行った。そして、まるで魔法の案内人が手iarouそくをかざして、私のために道を照らしてくれるように、行く手にはいくつもの一筋の日光がさし込んでいたのだ。この光を受け入れるために、道がひらかれていくようなものだった。」 Proust, Marcel 'Arbertine Disparue', Paris, Nouvelle Revue Française, 1925



井戸の構造
『ヴェネチア 水上の迷路都市』/ 講談社

どの島にも自然発生的に、カンボと呼ばれる小さな広場が生れた。ひとつの島は、ひとつの教区にあたり、その中には教会があり、鐘楼がそびえている。教会の核として、そのまわりに共同で使う空地・畑＝カンボと家々が作られた。

カンボは住民の飲料水を供給するために重要な役割を果たしていた。ラグーナの浮き島では、井戸を掘っても良質の地下水が得られない。そこで雨水をためて濾過する貯水槽が発明され、島の生活に欠かせないものになった。カンボ全体が貯水機能を担う革命的装置だったのだ。今では大陸から引かれた水道が各家に水を供給しているが、かつてはカンボに水を汲みに集まる女性達の華やかな井戸端会議の光景が見られただろう。

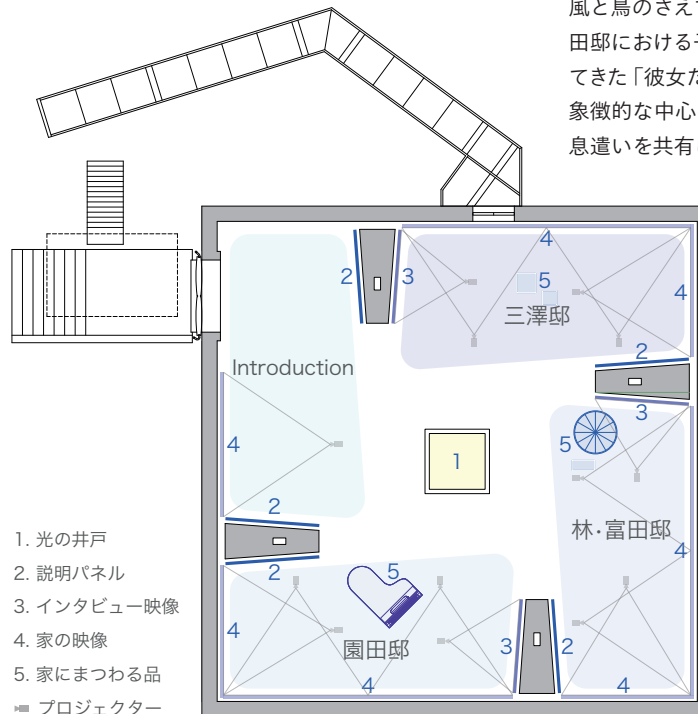
80あるカンボに100もある井戸は、吉阪の心に響いたにちがいない。本展覧会が行われる日本館の中心にある「光の井戸」も吉阪にとって象徴的な要素だ。最初これは日本館建設準備委員会から否定されていたが「天と地をつなぐ要素であり曲げられない」との想いを強調するうちに納得され、また、大きな壁柱が室内を区切ってしまうと否定されたことについては、10m×5～7mが展示スペースとして快適であることを主張して認められることになった。かざぐるま式に配置される壁柱は室内を区切るというより、快適なスペースが井戸のまわりを廻転しながら連続していくという感覚を作り出し魅力的な空間が生まれると確信していたと考えられる。

ピロティ案に関しては、委員会から提案されていた展示作品数が展示室におさまりきれない量であって、ピロティにその一部を受け持ってもらうことが有効だということを主張し、結果として、開放的空間と閉鎖的空間を狭い敷地の中でのびのびと両立させることができたのだ。

そして何より、日本館は、そのスケールと井戸を中心とする組立によって、人々の暮らしの中心であったカンボを再現しているように思われるのである。

これらの基本的組立を踏まえて、展示計画を次の段階へ進めていきたい。

(とみた れいこ 建築家)



1. 光の井戸
 2. 説明パネル
 3. インタビュー映像
 4. 家の映像
 5. 家にまつわる品
- プロジェクター

園田春子さん[ピアニスト 園田高弘夫人]

「自由が丘の家（園田邸）」吉村順三 / 1955 年

「この小さな家は丸ごと全部、ピアノの音響の為に作られてる。オルゴールの宝石箱みたいね。」



写真提供：園田春子

園田邸における、音楽と建築の響き合い、三澤邸における吹き上げる風と鳥のさえずり、積み上げられてきた建築家たちとの思い出、林・富田邸における子供たちの声、それぞれの家には、住まい手がつくりあげてきた「彼女たちの時間のかたち」があります。象徴的な中心の吹抜の周りを4つのエリアにわけ、それぞれの家の息遣いを共有します。

三澤満智子さん[美術家] +

星(三澤)知雅さん[美術家]

「三澤邸」吉阪隆正 + U 研究室 / 1974 年

「住人にとっての我が家は、家族の歴史の痕跡を積み重ねたものです。住んでいるからこそ見える景色があり、物語があります。」



photo 北田英治

富田玲子さん[建築家] + 林のりこさん[料理家]

「セキスイハウス M1（林・富田邸）」積水化学工業 + 大野勝彦 / 1972 年

「スマートな『はだかの箱』に、デッキや下屋や大屋根、螺旋階段がついて、ときにはテントもかけられ、樹木は大きく育って『毛深い家』になった」



写真提供：富田玲子



四大の「地」

水沢 勉

ヴェネチアのジャルディーニ公園は、晩秋から冬にかけて、寂しげな雰囲気を湛えはじめる。そのとき落葉の樹々のあいだを歩いていくとき、さまざまなイベントで賑わい、観光客に溢れ、高揚感に満ちた春と夏の、まばゆい光の季節にはあまり気にならなかった足元の地面がしっかりと感じられるようになる。

水の都であるヴェネチア。そこに旅し、いくばくかの時間を過ごすものには、いつでも水の変化が気になる。近年の気候変動による海面上昇も町の風景を変化させ、コロナウィルスのパンデミックは、観光というモードを中断させはしたものの、運河の水が透明になり、魚たちなどの水中動物の様子も観察できるという予想外のニュースが話題となった。

ただ、そのときもジャルディーニ公園の地面がことさらに話題になったことはなかったのではなからうか。

日本の中世を代表する随筆のひとつ鴨長明の『方丈記』にはこう書かれている。「四大種の中に、水火風はつねに害をなせど、大地に至りては殊なる變をなさず。」

13世紀はじめ頃、鴨長明が暮らした京都では、水害、火事、竜巻ばかりでなく、巨大な地震にも見舞われている。それでも「殊なる變をなさず」に日々の暮らしはつづくことになる。「地」の持続性こそがひとびとの生活を可能にする。

最終的に鴨長明は京都郊外の山中に「方丈」と呼ばれる小さな家を構え、ひとりで暮らすことになる。歌人として知られ、琵琶の奏者としても一家をなした。それでもなによりも小さな家での暮らしを優先した。その思いが「方丈記」に綴られている。

住居と暮らし。その時間をテーマとするメイン展示に、現在を生きるアーティストたちにいまの時間を添えてもらうべく、三人の表現者に参加を依頼する予定。

鈴木昭男は、サウンドアートを代表する第一人者であり、ジャルディーニ公園の音環境を意識させてくれる。グローバルなメッセージを発信しつづけるイラン出身のホセイン・ゴルバは、彫刻に発する空間意識にいつでも時間意識を重ねる。また、霧の彫刻で知られる中谷芙二子は、変容する水を介して、ジャルディーニ公園という場そのものを際立たせる。

仏教のいう「四大」のうち、「地」がどのようにわたしたちの暮らしと結びついているのか——そのことをかれらがその作品を通じて浮きあがらせてくれるにちがいない。

2024年4月30日

(みずさわ つとむ 美術史家・美術評論家)

出品作家（以下、五十音順）

ホセイン・ゴルバ

イラン生まれ、1976年よりイタリアに移住。ミラノ・ブレラアカデミア美術学校卒業。1997年より来日。住宅遺産「加地邸」(1928年/遠藤新設計)での展覧会の際、庭から発見された時計を作品化、本展覧会で展示予定。



「母」の制作風景

鈴木昭男

早稲田大学で建築を学んだ後、音に興味をもつようになる、アンビエント音楽の第一人者であり、ヨーロッパを中心に世界各地で音のパフォーマンスを行っている。



中谷芙二子

「霧の彫刻」と呼ばれる作品群やメディアアートの活動で知られる。自然環境と人間の関係、メディア環境と人間の関係などをテーマとしている。



「霧の森」1992年
国営昭和記念公園こどもの森、立川、東京
撮影：小川重雄

指名キュレーター

木下壽子＋吉見千晶 一般社団法人住宅遺産トラスト

2008年より、土浦亀城自邸（1935年）、園田高弘邸（1955年/吉村順三設計）、Villa Coucou（1957年/吉阪隆正設計）、から傘の家（1961年/篠原一男設計）、前川國男自邸（1974年）等の歴史的、文化的価値の高い住宅の保存・継承活動に従事、現在に至る。2022年日本建築学会賞（業績賞）受賞。

キュレーションチーム

水沢 勉

美術史家・美術評論家

神奈川県立近代美術館館長(2011-2024)。横浜トリエンナーレ2008年の総合ディレクター。加地邸（神奈川県葉山町/遠藤新設計/1928年竣工）の継承活動に尽力いただいた縁で協力を依頼。2016年、加地邸にて開催した展覧会「ホセイン・ゴルバ展：時を彫る」にてキュレーションを務める。本展覧会において、アーティストの選定、展示などのキュレーションについて教示を仰ぐ。

富田玲子

建築家

1963年より吉阪隆正が主宰するU研究室に所属、1971年より象設計集団設立。2007年「自由が丘の家（園田高弘邸）」(吉村順三設計/1955年)について、園田夫人より相談を受け、一般社団法人住宅遺産トラストに繋ぐ。住宅遺産トラスト顧問(2013-2023)。「セクスイハイムM1」の住まい手。吉阪隆正設計の日本館と、本展示の関係を考察する。

近森基 plaplaX

インタラクティブな作品制作を軸に、展覧会の展示構成、空間演出、映像コンテンツの企画制作など幅広く活動する。さまざまな手法やメディアを使って、創造的な学びや発見のある経験的な作品に取り組む。

新津保建秀

写真家

東京藝術大学大学院美術研究科油画修了。映像制作をきっかけに独学で写真を習得し、ポートレートや風景、建築写真などの分野で活躍。他分野のアーティストとの協働も多い。

協力：窪添正昭 [建築家]、新堀学 [建築家]、前田美保子

予算概要

項目	詳細	金額
関係者旅費	20万円×14回往復分(キュレーター2名+作家3名×2回、キュレーションチーム4名)	¥ 2,800,000
関係者滞在費	宿泊、食事等	¥ 1,500,000
協力者謝金	7名	¥ 1,500,000
展示施工費	パネル制作、インスタレーション作品(土、水、霧、石)制作	¥ 5,000,000
機材購入orリース費	映写機など	¥ 10,000,000
コンテンツ調達費用	ピアノ、螺旋階段の現地調達費	¥ 2,000,000
出展作品輸送費	机、彫像、絵画など	¥ 1,000,000
イベント開催費	10万円×10回程度	¥ 1,000,000
カタログ作成費	デザイン、翻訳、印刷など	¥ 1,500,000
保険料		¥ 500,000
計		¥ 26,800,000

※不足分については、協力金などを募る予定。

スケジュール

2024 年	5 月～ 6 月	キュレーターの決定、記者発表
	6 月	現地視察 出品作家との打ち合わせ
	6 月～ 9 月	撮影・作品制作・展示設計
	7 月	グラフィック 関連打ち合わせ
	9 月～ 11 月	映像編集・パネルなどの制作
2025 年	11 月～ 12 月	ヴェネチア・ビエンナーレ財団への資料とりまとめ
	1 月	出展作品の確定、資料をヴェネチアビエンナーレ財団に提出
	2 月	出展作品の発送(船便の場合)
	4 月	出展作品現地到着
	5 月	会場での展示指導・監督。記者発表会への出席、広報協力、開会式出席
	5 月～ 11 月	第 19 回建築展開催
	11 月	撤収